発生の場/Ignition Field レビュー

安原彩絵

佐賀大学美術館は 2013 年に開館した全国にも珍しい国立大学の美術館である。地域に根ざした美術館としての運営を行なっており、特別芸術に関心があるわけではないが散歩のついでに立ち寄るという市民も少なくない。

そんな佐賀大学美術館で今回開催された「発生の場/Ignition Field」は、ゲストアーティスト４組と協力キュレーター１名による、同館初ともいうべき現代アートのみで構成された展示だ。館内に入るとすぐに目を引くのは、受付カウンターの足元に設置されている鈴木淳氏の映像作品《そこにそこ　あしがみえる》。モニターに映し出されたプラプラと動く足は、カウンターに座る職員の本来見えるはずのない足のように見え、私たちの感覚を揺さぶる。第1展示室ではチェ・ヨンファン氏の作品《私たちは何のために戦っているのか》が鈴木氏の対面壁一面を埋める。「共同体の中の個人」に着目したチェ氏の作品には写真のコラージュの他に複数の言語で言葉が書かれており、「個人」の切実なメッセージが伝わってくる。福田篤夫氏の作品では、アルミニウムに貼られた金箔が薄暗い展示室の中で外光を反射し厳かに輝く《colour and/or monochrome 2020 》が印象的だ。漆や銀箔など日本の伝統的な素材を用い、すべての作品を四角かそれを曲げたもので構成する展示からは、福田氏が探ってきた今日の日本美術を体感できる。一方、「静」を感じる福田氏とは対照的に、上村卓大氏は自身の子供が作ったものを拡大した作品を中心に、社会の中で生活しながら制作するということで生まれた「動」の気づきを感じさせる。《聖者の行進（右利きの楽団）》は別の作品で使った方眼紙とカッティングシートの余った切れ端を使っており、制作の途中で自身の子供から得た気づきによって、制作し始めた頃とは違った方向へと展開していったそうだ。

また、美術館の隣に位置する空きスペースではアートカフェが計四日間開かれた。温かいお茶やコーヒーを飲みながら、感想を語り合ったり関連書籍を読んだりしてもらえる場所だ。カフェの壁面には感想のかけるスペースが設けられている。鑑賞を通じて芽生えた思いをその場でアウトプットしてもらうことによって、参加者の中により展示を落とし込んでもらうおうというねらいである。カフェではスタッフが同じ展覧会をみた鑑賞者として、参加者の内に眠っているものの言語化を促進するファシリテーターとして会話することによって、考えを深めることの手助けをしている。

今回の展示は現代アートということで、いつもの調子で立ち寄った地域の方や現代アートに抵抗感を感じている方にとっては戸惑うことも多かったかもしれない。実際アートカフェに訪

れて、どう解釈すればいいのか分からないと口にする人もいた。しかし一口に現代アートといっても、4人の展示はテーマとしているものも、作品の素材も、設置の間隔もそれぞれ大きく異なる。一つの展覧会で様々な形のアートに触れ、様々な切り口から解釈できるのだ。一つ一つの作品の判読に困った人も展覧会全体から感じたものは大きく、カフェでそれらを整理することによって、考えがいっそう豊かになっていったように感じた。地域に開かれた美術館である佐賀大学美術館。今回の一連の企画で、その特性を生かしたさらなる可能性が芽生えたのではないだろうか。